

cat girl



quianred

1・幸生

二十歳年上の将一兄ちゃんと、十八歳年上の隆也兄ちゃん。僕は両親がかなり年を取ってからできた子供だ。それまでだって両親と兄たちの愛情を一身に注がれて育ってきたのだけれど、両親がいなくなったあの夜、途方に暮れて、泣くこともできずに呆然としている僕を、兄ちゃんたちは両側から抱きしめてくれた。

「お父さんとお母さんは交通事故だったんだよ。お父さんにもお母さんにももう会えないんだけど、おまえを天国から見守っていてくれるんだ」

将一兄ちゃんは言い、隆也兄ちゃんも言った。

「俺たちがいるだろ。幸生、こんなときには泣いてもいいんだよ」

「男の子なんだから泣くな、なんておまえに言ったけど、今日は特別だ。思う存分泣いて、明日からは元気になろうな」

そう言われて堰を切ったかのようにあふれ出した涙。僕は兄ちゃんたちに抱きついて、涙が枯れるまで泣いていた。泣くだけ泣いたら眠くなった僕を、兄ちゃんたちはベッドに連れていってくれ、かわるがわる頭を撫でてくれた。

「あのね、兄ちゃんたちもここにいて」

「いるよ。隆也、今後の相談もしなくちゃな」

「そうですね。幸生、おまえはおやすみ」

うん、とうなずいて目を閉じて、夢うつつの状態で、僕はふたりの兄の会話を聞いていた。

「幸生は俺が育てるよ。おまえは出ていってもいいんだよ」

「そうは行きませんよ。このやんちゃ坊主は、兄さんひとりの手には負えないでしょ。俺も協力します」

「幸生はまだ一年生だよ。先は長いぞ」

「覚悟してます。こいつは兄さんの弟でもあり、俺の弟でもあるんだから」

「そうか。隆也、頼りにしてるよ」

「はい、頼りにして下さい」

そこで兄たちの会話は途切れ、薄目を開けて見ると、ふたりとも黙って泣いていた。

いつだって大きくて強くて、お父さんが三人いるかのように、兄たちは泣いたりしないのかと思っていた。だけど、お母さんとお父さんが死んでしまったのだから、泣くのは当たり前なんだよね、と僕も黙ってうなずいた。

あれから八年、僕は十四歳になった。将一兄は作曲家で、隆也兄は作詞家だ。両親が亡くなったところには駆け出しだったようなのだが、現在ではけっこう売れっ子になって、収入も少なくは

ないらしい。

僕が十四歳になったのだから、将一兄は三十四歳。隆也兄は三十二歳だ。ふたりともに背が高く、弟の目から見てもかっこ悪くはないのだが、なぜだか彼女はいないらしい。近頃しきりと兄たちの彼女ってものが気がかりになってきたので、僕はピアノに向かっている将一兄に質問してみた。

「兄ちゃんって結婚しないの？」

「こんな悪ガキのコブがついてる俺と、どこのどなたが結婚してくれるんだよ」

「僕のせい？」

「おまえのせいばかりじゃないよ」

「もてないんでしょ？」

「それもあるけど、俺はいまだ作曲修行中の身だ。女どころじゃないんだよ」

「実はこっそり、女のひととつきあってるとか？」

「幸生、ませた台詞は十年早い」

「僕には彼女がいるんだよ。なのに、兄ちゃんにはいないの？ だらしねえの」

「おまえに彼女がいるのか？ クラスメイトの女の子か。一度連れてこい」

彼女がいるなんてのは嘘なので、うん、そのうちにね、とはぐらかして、将一兄のもとから逃げ出した。隆也兄は庭の花に水遣りをしていて、僕は窓越しに話しかけた。

「隆也兄ちゃんには彼女がいる？」

「いないよ」

「ほんとかなあ。もてないの？」

「もてないよ」

「三十すぎて彼女もいないって、寂しいでしょ？」

「おまえがいるから寂しくないんだよ。幸生、彼女がどうのこうのと言ってないで、宿題はやったのか。予習復習もやったのか」

大人ってのはすぐにこうやってはぐらかす。彼女の話は兄たちには痛いようなので、僕は別のことを言った。

「隆也兄ちゃんも将一兄ちゃんも背が高いのに、弟の僕はなんでちびなの？ 実の兄弟じゃないのかな。だいたいさ、十八も二十歳も年が離れてるってのは変だよ。ほんとは僕って、お母さんが浮気してできた子供なんじゃないの」

「幸生、お母さんを侮辱するような台詞は許さないぞ。出てこい」

「やーだよ」

言ってみただけだもんね。だけど、もしも本当に実の兄弟ではないのだとしても、僕にとっては大好きな兄ちゃんたち。兄ちゃんたちがいなかったとしたら、僕は孤児院に入れられていたのかもしれない。

八年も前に死んでしまった母さんは、僕の中では理想の女性像のようになっている。写真の母さんは若くはないけれど、とっても綺麗で、とっても優しく微笑んでいる。あんな母さんが浮気なんかするはずがないじゃないか。僕だって知ってるよ。

「まったくおまえはませガキなんだから……俺たちの育て方が悪かったんだろうか」

ぶつぶつ言っている隆也兄ちゃんにあっかんべをしたら、生垣の中で小さな生き物が動いているのが見えた。

「猫だっ!!」

窓から飛び出して逃げようとする猫をつかまえた。子供の猫は僕の腕の中で、いじらしい瞳で僕を見つめ、みゅうっと鳴いた。

「ねえねえ、猫、うちの子にしていいでしょ？ 僕はちっちゃいころから猫がほしかったんだ。覚えてるよ。父さんと母さんが生きてたころにも、猫がほしいって駄々こねてさ」

ママは幸生を育てるのに精一杯で、パパは仕事が忙しくて、ペットは無理なのよ、と母は優しく言った。それでも駄々をこね続けていたら、そこに入ってきた将一兄にきつく叱られたっけ。あれから両親が亡くなり、猫どころではなくなっていたのだが、もういいはずだった。

「僕はもう子供じゃないし。ねえねえ、いいでしょ？ 僕が面倒見るからっ」

「おまえが子供じゃないとは承服しがたいけど、将一兄さんがいって言ったらな」

「将一兄ちゃんっ、猫っ!! 猫猫猫一っ!!」

なんだなんだ、騒がしい、と言いながらあらわれた将一兄ちゃんは、僕の腕の中の子猫の頭を指一本で撫で、言った。

「おまえの声だと俺の部屋まで聞こえたよ。責任持って面倒見るって約束するんだな」

「うんっ」

「淡い銀色の毛皮か。珍しい猫じゃないのか？ 捨て猫なんだろうか」

「そうだよ。首輪もつけてないし」

しばらく考えてから、将一兄は言った。

「うん。誰かが探しにこなかったとしたら、うちの子にしよう。名前はなんてつけるんだ？」

「んんとね、みゅうって鳴いたから、みゅう」

「女の子か？ そうみたいだな」

僕の腕の中から猫を抱き取って、将一兄は性別を確認しているようだった。やーだ、えっち、と僕が言ってみると、将一兄は苦笑して、僕の腕に猫を戻した。

「大切に可愛がってやれよ。みゅう、よろしく」

「彼女を可愛がって大切にするように？」

「こら、まったくおまえは……」

このませガキが、とふたりの兄に言われたのだが、そうして僕たちの家庭に家族が増えた。男ばかりの殺風景な家の中に、猫の女の子がやってきて、家族の一員となったのだ。

小学校の一年生だったころに死んでしまった両親の職業は、僕はよくは知らなかったのだが、兄たちが教えてくれたところによると、父はクラシックの楽団の指揮者。母も独身時代には父が指揮をしている楽団でヴァイオリンを弾いていたのだそうだ。

父もお金持ちだったらしく、家は広い。兄たちの音楽的才能は両親譲りなのだから、僕にもその血は流れているのだろう。僕は将来は歌手になりたいと夢見ているのだが、それはまあ置いておいて。

広い家の中を子猫が駆け回る。兄たちも無口ではないし、僕は口から先に生まれてきたと兄たちに言われるほどなのだから、もともと賑やかだった家に、猫がふえて賑やかさが数倍になった。猫が大好きな僕だけど、猫と暮らすのははじめてなので、新鮮な驚きが続出した。

ちっちゃくて鋭い爪を立てて、みゅうがカーテンを駆け上がる。カーテンとともに落ちてきて、布地の中でもがいている。助け出してやった僕の腕をすり抜けて、どこへともなくすっ飛んでいく。追いかけていってみると、兄たちの楽譜の中にダイビングして、メチャクチャにして遊んでいる。

「駄目だよ、みゅう。兄ちゃんたちの大切なものなんだから、僕の責任にされちゃうよ。あ、将一兄ちゃん……僕はしっさいけないって言ってるのに、みゅうが言うことを聞かないんだよ」

「みゅう、めっだよ」

将一兄が抱き上げたら、みゅうはその手に噛みついて逃げ出していく。こんなはずら猫は捨ててこい、とでも言われるのかと、僕は不安な気持ちで兄を見上げた。

「あのね、あのね……」

「猫なんてのは、人間の言うことなんか聞かないようにできてるんだよ」

「怒らないの？ 僕がちっちゃいころに楽譜をおもちゃにしたら、怒ったくせに」

「おまえは人間なんだから、叱られたら聞けるだろ？ 叱られても聞かないときもあったけど、意地を張ってはいても、反省して二度としなかったじゃないか。あんなときもこんなときも思い出してごらん。みゅうは猫なんだからしょうがない。猫の手の触れる場所に楽譜を出しておく俺たちがよくないんだな。おーい、隆也、片づける」

呼ばれてやってきた隆也兄も、みゅうに怒ったりはしなかった。

猫にもさまざまな性格があるのだと、猫好き友達が教えてくれた。おとなしいのもいるのだそうだが、みゅうはとびきりのいたずらっ子だ。壁で爪とぎをしたり、猫じゃらしで遊んでやっていると興奮して、僕の手で猫キックをしたり、ひっかいたり噛みついたり、やりたい放題やっていた。

本棚に駆け上って本と一緒に落っこちてきたり、カレンダー目掛けてジャンプして、カレンダーと一緒に落ちてきたり、あまりのいたずらぶりに僕はたまには怒ってしまったのだが、兄たちは怒らない。そんなに甘やかすから、みゅうが図に乗るんだと言いたくなった。

「猫ってのはまったく……女だな」

いたずら三昧して眠ってしまったみゅうを抱き、廊下を歩いていると、将一兄の声が聞こえた。ドアに耳をくっつけると、隆也兄の声も聞こえた。

「兄さん、思い当たる人間の女性がいるんですか」

「そんな話はしてないけど、猫ってのがあんなに可愛いものだとは知らなかったよ」

「可愛いですよ。幸生は一人前の顔をしてみゅうを叱ってますけど、俺も叱る気にはなれないな。ひたすらに甘やかしたくなる。みゅうの寝顔ときたら……」

「隆也、おまえこそ、誰を思い出してるんだ？」

「みゅうですよ」

わははっ、とふたり分の笑い声。盗み聞きなんかすると僕ならば叱られるだろうから、足音を立てないようにその場を離れ、みゅうの寝顔を見つめた。

「ほんっとに可愛いよな。みゅう、好きだよ。好き好き好き。しゅきっ!! 愛ちてるうっ!!」

こうして猫が身近にいと、いくつもの発見がある。猫には幼児語で話しかけたくなるんだとは、僕はそれもはじめて知った。

人間が三人ともに居間にいる夜。いたずらをしていたみゅうは眠くなったのか、隆也兄の膝によじ登る。みゅうは僕の猫なのに、と言いたくなって、言うとかきだと笑われるだろうから我慢していると、将一兄が隆也兄の膝から、みゅうを抱き上げた。

「俺の膝のほうが隆也よりもすこし広いから、寝心地がいいだろ。ここでねんねしなさい」

「みゅうは俺にくっついたかったんだよな。みゅう、こっちにおいで」

「俺だろ。みゅう、どっちがいいんだ？」

「みゅう、どこに行くんだよ」

うるさい兄ちゃんたち、とでも言いたげに、みゅうは僕のほうへと歩いてくる。僕がいいんだよね、と抱き上げようとしたら、ぷいっと顔をそむけ、僕の手をばしっと叩いて、ソファの上で丸くなってしまった。

「つれないね。幸生、おまえにはまだ早いだろうけど、猫ってどこかしら人間の女に似てるんだぜ」

「兄さん、たしかに幸生には早いですよ」

「いいや。幸生もいずれは人間の女と恋をするんだ。人間の男ってのは、女のつれなさや冷たさも丸ごと受け止めて、悩まされ翻弄されて、そうして器を大きくしていくんだろ。幸生にも教えておかなくちゃ」

「早いですよ。こいつはまだ十四なんですから」

「俺が十四歳のころか……うん、幸生、あと五年ほどしたら、改めて教えてやるよ」

将一兄ちゃんが十四歳、隆也兄ちゃんが十二歳のころには、僕は生まれてはいなかった。我が家は四人家族で、兄たちは両親に愛されて育ったのだろう。僕だって兄ちゃんたちに愛されて育てられはしたけれど、母さんや父さんがいないのは寂しくもあった。

だけど、もう寂しくなんかないよ。兄ちゃんたちがいてくれる。みゅうだっていてくれる。最近僕以上にみゅうを可愛がっている兄たちを見ていると、微笑ましくさえ思えた。

猫は人間の女みたいだと言われても、僕には実感は湧かない。でも、今は彼女がいなくても、大人である兄たちにはそんな経験があるのだろう。幸生もいずれは、か。僕にもみゅうを人間にしたような、可愛い彼女ができたらいいな。

そうして季節がひとつすぎるころには、みゅうは大きくなりつつあった。僕たちの家に迷い込んできたころには幼児だったとしたら、もはや少女だろうか。ほっそりした肢体、つやつやのシルバーホワイトの毛並み。近所のひとも言ってくれる。みゅうはとびきりの美少女猫だ。

窓辺で寝ていたみゅうが目を覚まし、全身を伸ばして屈伸運動をしている。しなやかな猫の動きに見とれていると、目を疑うような現象が生じた。

「ええ？ ええっ?! 将一兄ちゃんっ、隆也兄ちゃんっ!! 来て来て来てっ!!」

自室で仕事をしている兄たちを呼んでいる間にも、みゅうの身体が変化していく。

とがった耳が引っ込み、毛皮が消えて、顔つきも身体つきも変わり、大きくもなった。毛皮は髪の毛になったのか、銀いろの長い髪が背中まで届いている。大きくなったので窓辺からはみ出したみゆうは、絨毯の上にくろがり落ちて、きょとんと僕を見上げた。

「なんだ。おまえが騒がしいのはいつもいつもだけど……え？ は？ どなた？」

居間に入ってきた将一兄も、きょとんとして僕に尋ねた。返事ができないでいると、兄は大慌てでシャツを脱いだ。

「なんて格好を……まさかだよな。幸生、おまえじゃないよな」

みゆうに駆け寄って脱いだシャツでくるんでから、将一兄は僕に向き直った。

「ごめん。やるわけないよな。だけど、彼女はおまえの友達か？」

「みゆうなんだけど……」

「ふざけてる場合じゃないだろ」

「ほんとだよ。僕はこの目で見たのっ。みゆうが変身したんだよ」

「そういったアニメでも見たのか。ふざけてるんじゃないかなかったら、おまえ、気はたしかか？」

「たしかだよ。兄ちゃん、みゆうが……」

「おまえは見るな。目を手でふさげ」

慌てて言う通りにしたのだが、ふさぐ前に見てしまった。僕にはみゆうが変身したのだと確信を持って言える人間の女の子は、みゆうだからこそなのか。裸でいるのが恥ずかしくないらしい。こんなのならない、と言いたそうに、将一兄がくるんでやったシャツを跳ね飛ばし、もとの裸に逆戻りしていたのだ。

「お嬢さん、きみは誰？ 幸生の友達？ だとしても、よその家で裸になったりしたらいけないでしょ？ 着なさい。きみの服は？ 口がきけないの？ お名前は？」

「……みゆう、みゆうだよ」

おわわーっ!! 僕の口から変な悲鳴が漏れ、目をふさいだままで言った。

「みゆう、口がきけるの？」

「んんとね……なんなんだろ。んんと……幸生、将一兄ちゃん。だよな？ いやいや。窮屈なんだもん」

「なにがなんだか俺にはわからないんだけど、着て下さい。みゆう？ みゆうのはずはないけど、なんにしたってきみは女の子なんだから、男の前で裸でいてはいけないんだよ。俺たちが困ってしまうんだ。着なさい」

「いらない」

「着なさい」

「やだあ。やだやだっ」

「いてっ!! 噛むな。ひっかくな。この態度は猫だな。にしたって……着ろっ!!」

どうやら将一兄は、みゆうに服を着せようと悪戦苦闘しているらしい。みゆうが言うことを聞かないのでついに怒鳴りつけ、みゆうはそれでもじたばたしていた。僕は目をふさいでいるので見えないのだが、気配は伝わってきていた。

「隆也は出かけたんだよな。この子の抵抗は……小さいくせに力があるみたいで……爪が……こうなったら……ごめんよ」

ぴしゃっと音がして、次の瞬間、みゅうが泣き出した。猫の鳴き声ではなく、人間の女の子の泣き声だった。

「ぶったあっ!!」

「おとなしくしないからだろ。女の子をぶったりはしたくないけど、着ないからだ。着なさい。窮屈だなんて言わずに着なさい。着なさい。みゅう、もうひとつ叩かれないのか」

「.....将一さんっていつも優しいのに、そうやって怒るのね」

「怒ってはいないよ。おまえ、本当にみゅうなのか？」

「そうだって言ってるじゃん。着るの？ 着ないと駄目？」

「着なさい」

「.....はあい」

ようやくみゅうはシャツを着たらしく、僕は目を開けた。僕と同じくらいの年齢の綺麗な女の子が、大人の男の大きなシャツにくるまれてぺたんとしてすわっている。裾も袖も長すぎて、手は爪まで隠れてしまっている。足首から下だけが見えていて、ほっそり小さな足が僕の頭をくらくらさせた。

「.....みゅうなのか？ 泣かなくていいから、話してごらん」

「みゅうだもん。みゅうなの」

「頭が.....割れそうだ。幸生、この子はみゅうなのか」

「そうだよ。僕もさっきからそう言ってるじゃん。みゅう、もう一度変身してみせて」

「変身？ んんとんと.....」

考え込んでいたみゅうは、銀色の長い髪をかきあげて言った。

「できないみたい」

「その髪.....みゅうの毛並みと同じ色だな。幸生、本当なのか？」

本当だよ、と僕とみゅうが口をそろえると、将一兄はどすつと絨毯にすわり込んだ。

自らコントロールはできないようで、いったいなにかどうなって変身するのは、本人、いや本猫か、本猫のみゅうにも不明であるらしい。むろん僕たちには不明も不明なのだが、それから一時間ほどして帰宅した隆也兄の目の前で、みゅうは変身した。

兄たちはそろって腰を抜かしたに近い状態になったのだが、目前で変身されては信じるしかなかったのだろう。信じたら受け入れるしかなかったようで、兄たちはふたりきりになって、長い時間話し合っていた。

「兄ちゃんたち、どうするつもりなんだろうね。うわわっ、またっ!!」

一度目は猫から人間に、二度目は人間から猫に、三度目の今は猫から人間に。みゅうは三たびの変身を遂げた。

人間が猫が変わるときには、着ていたシャツはみゅうの近くに落ちていた。猫が人間になると、当然裸だ。毛皮を着てくれていたらいいものを、毛皮は頭に集中して髪の毛になってしまいうらしいのだから、僕は焦って言った。

「着てよ。着ないと将一兄ちゃんに叱られるよ。ぶたれたんだろ？」

「そうだった？ んんと………忘れた」

猫の記憶はきわめて短時間しか持続しないのだとは、僕も知っている。しかし、みゅうはすべてを忘れてしまったのでもないようで、今度は素直にシャツを着てくれた。

大きな男のシャツに包まれたみゅうも、とてもとても魅力的だ。ほっそり華奢な身体がシャツの中で泳いでいる。変身とは疲れるものなのか、僕の膝にもたれて眠ってしまったみゅうを見ると、僕のどこかがもぞもぞしてつらかった。

「人間になっちゃったか」

静かにドアが開き、兄たちが入ってきた。

「アニメなんかにはありますよね、猫耳少女ってのが。小説にもありますね。猫が美少女に変身するのは、ちょっとばかりエロティックなコメディというのか、そういうのの定番ですよ」

隆也兄が言い、将一兄も言った。

「幸生の妄想が形をなしたってわけでもないんだよな。ポルノティック……とっと、幸生の前ではできない話だな」

「いいんじゃないですか。幸生だって思春期の少年なんだから、ポルノは知ってるだろ」

「知ってるよ。兄ちゃんたちもポルノって見るの？ R18の映画だとか小説だとか雑誌とか？ どのなの？ 僕も学校に持ってきてる奴がいて、雑誌だったら見たことあるけど、映画ってどんなの？」

「そんな話はしてない。隆也、よけいなことを言うな」

「はい、すみません」

頭をかいてから、隆也兄は言った。

「みゅうが変身した女の子なんだから、このまもうちに住まわせるしかないですよ。だからね、こういった話題になるんだから、幸生にもはっきり言わないといけないでしょう？」

「そうだったな。幸生、人間になったみゅうに手を出すな」

「どれほどの美少女であっても、おまえの中にも明らかにある男がどれほど騒いでも、絶対にみゅうに妙なふるまいをするな」

「もしもやったら足腰立たなくなるまでぶん殴るぞ、とは言わなくてもいいよな」

怖い顔した兄ふたりに迫られると、やりません、と言うしかないではないか。

「僕はしないけどさ、兄ちゃんたちは大丈夫？」

馬鹿野郎、とふたりともに言われた。それから、将一兄は言った。

「それでだ、幸生。ご近所の目つてもものもある。ここにみゅうを置いておくのはまずいだろ。親戚の女の子を預かっているとでも言えばいいのかもしれないけど、こいつは変身するんだ。どんな原理で変身するのかも、いつ変身するのかもわからない。ご近所の方が見ている前で変身したとしたら、弁解もなんにもできないだろ」

「おまえには学校があるから無理だけど、俺たちの仕事は家でなくてもできるんだよ。兄さんと相談して決めた。みゅうは山荘に移す。兄さんと俺が交代で山荘に住んでみゅうの世話をするよ。おまえも休みになったら遊びにくればいい」

「そうしかできないだろ。おまえはみゅうと別れるのは寂しいだろうけど、聞き分けられるね？ 子供じゃないんだろ」

「僕も転校したらいけないの？」

「うちの山荘の近くには、中学校はないよ」

「おまえだって受験が近いのに、この時期にってのは……」

いやだーっ!! と叫びたかった。ちっちゃいころみたいに絨毯の上にひっくり返って、手足をばたつかせて駄々をこねたかった。

両親が生きていたころには時にはそうやって駄々をこねて母を困らせ、父はそんな僕をあやしてくれようとし、兄たちには叱られた。両親はちっちゃな僕にはあくまでも優しくかったけれど、兄たちは時にはきびしかった。

三人きりの家族になってからも、兄たちは僕を優しくきびしく教育してくれた。いつだって僕が優先で、兄たちは好き勝手にはしてこなかったと知っている。パパやママを思い出すと寂しくなったりもしたけれど、兄ちゃんたちに甘えていれば、寂しさすらも忘れていられた。僕はもう、ちっちゃな子供ではない。

みゅうがいなくなって、どっちかの兄ちゃんが留守がちになったら、寂しさが戻ってくるのかもしれない。だけど、そうやって僕は本当の大人になるんだよね。寂しいけど我慢しなくちゃ。

「うん。わかったよ。でもさ、兄ちゃん、僕からも忠告するからね。みゅうとふたりきりで、みゅうが女の子になっちゃったら、変なことをしたら駄目だよ」

はい、わかりました、とふたりして真面目にうなづく。ひょっとして、それって本当にあり得るのだろうか。

2・隆也

人間になったみゅうの声が聞こえる。どこで騒いでいるのだろうかと見回すと、山荘近くのさやかな森の樹木の上に、全裸のみゅうがすわっていた。

「おまえは……そんなところで変身しちまったのか。降りてこれられないのか？」

「猫だったらできるけど、こうなったら降りられないよ。怖い」

みゅうの語彙ってやつは、子猫時代に家族の会話を聞いていて身につけたのだろう。一人前に喋る。猫の声と似ているようでいて微妙にちがう、愛らしい少女の声で言って、みゅうは樹の幹にしがみついて震えていた。

「待ってる。そこにくっついてるよ」

「隆也兄ちゃん、怖いよお」

基本的にはみゅうは幸生のスタンスだ。であるから、俺を隆也兄ちゃんと呼ぶ。やんちゃな弟にやんちゃな妹が加わって、が、みゅうは本当は猫なのだから、ややこしいのだ。

木登りをしていって腕を伸ばすと、みゅうは少女の華奢な全身を俺に預けてくる。みゅうは猫だ、人間の姿をしていれば妹だ。そうと言いついて聞かせていないと、俺だって男なのだから、こうして全裸の少女を抱えていれば、変な気持ちが起こるのは否めない。

小さくて軽いのが幸いのみゅうを抱いて樹から降りてくると、怖かったよお、と言って俺にしがみつく。降ろそうとしても離れないので、抱いたままで別荘に帰っていった。

両親が残してくれた山荘は、近隣には人家はない。だからこそみゅうを連れてきても人に見られる恐れが少ないのだが、無人島ではないのだから、人がまったくあられもないわけでもない。俺はみゅうを山荘に連れて帰り、言い聞かせた。

「ひとりで外に出るなど言っただろ。猫の姿のときには言っても無駄だったのか。だけど、すこしは俺の言いつけを覚えていられないのか？ 人間のときには覚えてるんだろ」

「猫になったら忘れちゃうもん」

「そうみたいだな。とりあえず、服を着なさい」

「服って窮屈だから嫌いな」

「そうなんだろうけど、人間になったときには着なさい。木登りなんかするから汚れちまっただろ。シャワーを浴びて服を着なさい」

「やだあ」

「みゅう」

睨んでみせると、渋々俺の言う通りにした。

女の子の衣装はそろえてやって、みゅうはワンピースならば着る。が、下着をつけない。猫は衣服なんて着るようになっていないのだから、みゅうが窮屈がるのはわかるのだが、裸でうろつかれては目のやり場に困る。

羞恥心なんてものがみゅうには皆無なのは、猫なのだから当然なのであろうが、俺は人間の男だ。可憐な裸の少女を目の当たりにして、動じずにいられるわけがない。

シャワーを浴びて出てきたみゅうは、クロゼットを探っている。みゅうは窮屈な衣装は一切拒否し、ゆったりしたものしか着ない。なのでワンピースばかりを買ってやったのだが、下は裸...

...となると、俺の煩惱は刺激されるのだ。

「隆也兄ちゃん、着たよ」

「それは俺のдар。ぶかぶかのタンクトップなんか着てると.....女性の手がほしい。おまえに女性から言い聞かせてもらいたいよ」

秘密を知る人間が増えるのはよくないだろうから、女性に手伝ってもらうのは不可能だ。俺には彼女はいなくもないけれど、彼女とはさして深い仲でもないのだから、みゅうの秘密を打ち明けられない。にしたって、男には言い聞かせるったって限度があるではないか。

大きすぎるタンクトップから、みゅうのこぶりの乳房が見える。行儀なんてものにもまったく頓着していないので、身動きするたびに、少女の身体の少女そのものの部分がちらちら見える。人間になっても柔軟な動きに変化はなく、あり得ないようなポーズも取る。ふとした拍子に丸い尻もあらわになる。耐え切れなくなってきたので、俺はクロゼットからワンピースを取り出し、みゅうの頭からかぶせた。

「暑い」

「いいから着なさい」

「やん、怖い」

思わず声が荒くなると、みゅうは怯えた様子になった。そのくせ、俺にしなだれかかってきた。

「みゅう、眠くなっちゃった」

「寝てもいいよ。ベッドで寝る？」

「隆也兄ちゃんとねんねしたいの」

「俺は仕事だよ」

「お仕事なんかしたらいや」

無意識の媚態か。猫とはこういったふるまいが尋常なのだろう。早く猫に戻らないかと期待したのだが、みゅうは人間の少女のままで、俺を甘えた瞳で見上げた。

「抱っこ。ベッド」

「よしよし。連れて行ってやるから、おとなしくねんねするんだよ」

「隆也兄ちゃんも一緒に？」

「ねんねするまではそばについててやるよ」

「ずーっと一緒。やんやん、ずっと一緒」

「しょうのない子だね。わがまま言わないの」

軽く叱ると、みゅうは俺の腕をひっかいて、身をひるがえして走っていった。

「みゅう、いい加減にしないと.....」

追いかけていってみると、みゅうは俺が仕事場にしている部屋に入り、パソコンのコードをかじっていた。こういういたずらはまさしく猫だ。俺はみゅうをとっつかまえて言った。

「感電するぞ。コードなんかかじったら、電気がびびって来て、おまえみたいにちっちゃいのは死んでしまうかもしれないんだよ。命にかかわることなんだから、猫になっても覚えていなさい。みゅう、わかった？ 返事は？」

「わかんない」

「猫ってのはそういうものなんだろうけど、おまえって奴はどうにもこうにもどうしようもないほどわがままだな。みゅう？」

くたっと崩れたと思ったら、みゅうは俺の足元で丸まって寝息を立てていた。あどけなくも愛らしい、愛らしすぎる寝顔に、俺はため息をつくしかなくなってしまうのだ。

事前に兄から電話があった。

「隆也さんはどこに行ってるの？ って詰問されたんだよ。山荘にいます、猫を連れて行って山荘にこもって、仕事をしています、と言うしかないだろ。彼女、訪ねていくつもりだろうな。みゅうはどこかに閉じ込めておけよ」

「そうも行かないでしょう。閉じ込めたって飛び出してきますよ」

「縛っておくか」

「みゅうをがんじがらめに縛り上げるって、兄さんにはできるんですか」

「優しく縛ったって、あいつは縄抜けも上手だから、すり抜けてしまうよな。猫の姿のときに縛り上げたりしたら、人間になったら縄が食い込むのか」

「知りません。兄さんがやってみて下さい」

「やれねえよ。ま、おまえにまかせる」

「.....なんとかなるかな」

なんとかなるとは断言できないが、彼女が訪ねてくるのを断ったりしたら、他の女がいるの？ とばかりに誤解を招く恐れもおおいにある。

他の女はいるのだが、今日は女ではなく、猫のみゅうでいてくれ、と俺は願っていた。みゅうにお願いしてみたところで、彼女がおのが姿を操作するなんてことはできないのであるらしいから、言うだけ無駄だ。

山荘の場所は彼女には話したので、ここを彼女は知っている。俺の浅いつきあいの彼女、紅。「くれない」と読む彼女は、俺が仕事上で知り合って好きになり、告白してつきあうようになった。くれちゃんと呼んでいる彼女は、兄からの電話を切って数時間後に、山荘を訪ねてきた。

その瞬間、猫だったみゅうが少女に変身した。人間になっても聴覚はきわめて鋭敏で、車の音を聞き取ったのだろう。俺にしっかりとしがみついてきた。

「誰か来たよ」

「うん。おまえにも紹介するよ。俺の彼女だよ」

「彼女？ 将一兄ちゃんにも隆也兄ちゃんにも、彼女なんかいないって言ってたくせに」

「幸生にはそう言ったけど、いるんだよ。将一兄さんにもいるよ」

「そのひとと結婚するの？」

幸生が知っている程度のことは、みゅうだって知っている。幸生の知らないことも知っている。みゅうはどこにでも出没して、なんにも聞いていない顔をして、なんでも聞いていたのだから。

「都合の悪いことは忘れるくせに、そういうことだと覚えてるんだな。結婚なんて話はまだまだけど、お迎えしてくるよ。おまえは黙ってるよ」

「みゅうが猫だって、よそのひとには言ったらいけないでしょ」

「そのあたりはなりゆき次第だな。おまえは横から口出ししないように。みゅう、離れろって」
「やだ」

しっかりしがみつかれていては突き放しもできなくて、やむなく俺は、ワンピースを着せたみゅうを抱えて彼女を出迎えた。

「隆也さん……その子、なんなの？」

「話すと長くなるんだ。入って。みゅう！」

嫉妬なのだろうか。みゅうが目を吊り上げて、紅の腕をひっかいた。紅の白い腕に蚯蚓腫れが浮かび上がり、彼女は仰天した表情で突っ立っている。みゅうは俺の腕から飛び降りて逃げていき、俺は紅に言った。

「ごめんね」

「なに？ あの子、誰？」

「兄から電話があって、きみが来ると聞いた。秘密を知る人間はなるたけ少ないほうがいいんだけど、きみには話さざるを得ないかな。もしもみゅうがきみの前で変身したとしたら、きみも信じるしかなくなってしまうだろうしね」

「変身？」

「まずは入って。冷たい飲み物でも作るよ。アイスティでいい？ その前に、きみの腕の手当てをしなくちゃ」

「こんなの平気よ。アイスティもあとでいいから、話して」

ダイニングルームに紅を通し、俺は話した。

「……こういういきさつなんだけど、きみの目で見ないと信じられないでしょ。その猫がさっきの女の子。みゅうって言うんだ」

「弟さんが可愛がっている猫……悪いけど信じられない」

「だろうね」

「信じられないけど、隆也さんが女の子をここに連れ込んでるっていうよりは、いいのかもしれないね」

「俺はそんなことはしないよ。みゅうをご近所さんの目に触れさせると困るから、ここに連れてきてるんだ。最初は俺。しばらくしたら兄が交代してくれる」

「でも、みゅうって、やきもち妬いたんでしょ？ だから私をひっかいたのよ。猫って敏感なもの」

「信じてくれた？」

「そうだな。私もちゃんとみゅうに会いたい」

「あのわがまま娘は、どこかに隠れてるのかな」

「……隆也さんの口調、可愛くてたまらないって感じだよ」

「妹としてというか、猫としてというか、半々としては可愛いよ」

真摯な表情になって考え込んでいる紅を残して、俺はみゅうを探しにいった。猫というものは気配を消すのが得意でもある。猫の本質は人間に変身しても色濃く残すみゅうが、どこにいるのかはたやすくは判明しない。

家の中のほうぼうを探し歩いていると、庭で物音がした。みゅうがジャンプしている。なにを目掛けて跳んでいるのかと凝視してみると、吊るした玉ねぎにだった。

「玉ねぎって冷蔵庫には入れないほうがいいのよ。こうして吊るしておくのが一番いいの」

亡くなった母の教えを守って、俺が吊るした玉ねぎだ。首をかしげていたら思い出した。

「猫には食べさせたらいけないものがいくつもあるんだけど、ネギ類は厳禁なんだって。玉ねぎの入ったハンバーグなんかも駄目なんだよ。猫にはキャットフードがベストだから、それを食べさせておけば問題ないんだって」

友達に聞いたとかで、幸生が言っていたのだった。

とすると、みゅうに玉ねぎを食わせてはいけないではないか。止めるとよけいにムキになりそうだから、俺は庭に出て行って、みゅうをつかまえた。

「知っててやってるんじゃないのか。玉ねぎを食いたいんじゃないだろ。腹が減ったんだったら、おやつにするか？」

「いやいや。いらない」

変身なんぞしなかったころのみゅうには、子猫用キャットフードを食わせていた。変身するようになってからは、みゅうは人間の食いものをほしがる。猫のときにはほしがらないのだが、人間のときには食べたがる。

姿は人間でも中身は猫なのか。そこまではわからないのだが、猫には害になるものは食わせないと、三人で相談して決めた。みゅうはハンバーグなどは食べたがるのだが、そんな際には将一兄がきびしく叱りつけ、絶対に与えなかった。

「こんなものを食わせて病気にでもなられたら大変だぞ。変身猫だからっていうんじゃないけども、おまえたちだってみゅうの身体は心配だろ。猫には毒になるのかもしれないものをみゅうが食おうとしたら、ひっぱたいてでも止める。隆也も幸生も、わかったな」

食べたいよお、ハンバーグがほしいよお、と駄々をこねて、将一兄に叱られてびいびい泣いていたみゅうは可愛かった、だなんて、思いがそれていたのを引き戻して、俺はみゅうに言った。

「甘いのも猫にはよくないだろうけど、チーズは？ すこしだったらいいだろ」

食欲に負けそうになったのかもしれないのだが、みゅうは意地を張ってかぶりを振った。

「玉ねぎなんてうまくないぞ。みゅうの大好きなおやつをやるよ。煮干か？ おまえは人間のときには、猫のおやつよりも女の子のおやつがいいんだよな。プリンは？ オレンジは？」

「んんとね……」

「さ、おいで」

「みゅう、あのひと、嫌いだ」

「……困ったな」

どうやら嫉妬であるらしい。猫ってのはやきもちが激しいのだろうか。みゅうを抱きしめて泣かせてやりながら思案していると、紅の声がした。

「やっぱり信じられない。私はその子に嫌われてるみたいだから、帰るね。お土産をその子に食べさせてあげて」

「待って。もっと話を……」

「いいわ。隆也さんってロリコンだったのか。幻滅」

ぎゅうっとみゅうにしがみつかれ、可愛い泣き声を聞かされ、俺は紅を追えなかった。ロリコンの捨て台詞と、去っていく車の音が、俺を打ちのめした。

3・将一

ほーっとため息ひとつついて、隆也が言った。

「彼女にはふられたみたいですよ。兄さんは山荘には彼女を呼ばないほうがいいでしょうね」

「みゅうがなにかしたのか？」

「したといえばしたけど、それよりも……いいんです。俺はみゅうをも受け入れてくれる彼女を見つけますから」

自棄まじりのように宣言して、隆也は車に乗って幸生の待つ我が家へと帰っていった。

「みゅう、おまえ、隆也の彼女になにをしたんだ？」

質問してみても、ただいまのみゅうは猫だ。答えがあらうはずもなかった。

「俺にも彼女がいるって、隆也に聞いたか？ 俺にもいるんだよ。隆也と紅さんは深い仲でもないようだったけど、俺もさしたる深い恋人ではない。弟と同居なんかいやだな、って態度だから、プロポーズもしていないんだ。幸生が大学生になるまでは、結婚はしないつもりでいるからいいんだけどな。猫のおまえに言っても理解不能か。おまえは猫でいたほうが平和でいいよ」

猫でいてくれるほうが精神的には平和だが、みゅうは起きている間は次々にいたずらをしてかす。人間の姿をしている場合は多少は叱りもするが、猫のみゅうは叱れない。庭に出ていったみゅうがなにもものかと格闘しているので見にいくと、でかい青大将だった。

「みゅう、そんなのと闘ったら絞め殺されるぞ。やめろ」

なんとか青大将を追い払ったのだが、みゅうは猛っている。興奮していて、俺に向かって「しゃーっ!!」と叫び、つかまえようとしたら思い切り噛みつかれた。

「みゅう、落ち着け。泥んこになっちゃったじゃないか。毛づくろいをして泥をなめたら身体に毒だろ。風呂に入れてやろうな」

しっぽが五倍くらいにふくらんで、ふうふうはあはあ言っているみゅうを抱き上げ、風呂場に運んでいった。シャワーを浴びせている途中で、みゅうは女の子に変身した。

「……もはや驚きもしないけど、心臓にはよくないな。みゅう、猫だったときになにをしたのか、覚えてるのか」

「蛇と喧嘩してたよね。将一兄ちゃんが邪魔するから、殺してやれなかった」

「殺したかったのか。食うのか」

「蛇っておいしい？」

「蛇鍋なんてのもあって、人間も食わなくもないんだから、うまいのかもしれないな。みゅう、人間の姿で青大将と喧嘩してつかまえるか？ 今夜は蛇鍋にしようか」

「みゅうは人間のときには、おしとやかな女の子だもん」

「誰がだ」

きゃはっと首をすくめて、たった今気がついたかのように、みゅうは言った。

「将一兄ちゃん、えっち」

「えっちでやってるんじゃないだよ。人間だったら自分でできるだろ。あとはちゃんと洗って、服を着てきなさい」

「服、きらい」

「裸で俺の前に出てきたら、これだぞ」

手を上げて脅して、俺はダイニングルームに行った。

変身猫になったみゅうと幸生との触れ合いは短かったが、山荘にみゅうを移すまでの期間にも、みゅうは幾度か変身していた。猫から人間に変わるときには、当然ながらみゅうは裸だ。自由奔放が持ち味の猫のみゅうは、容易には服を着ない。

服なんか着なくてもみゅうは平気なのだろうが、男三人が困る。幸生は子供なのでどうしていいやわからない様子になり、隆也はうろたえているように見えた。

したがって、俺がその場にいれば、みゅうに服を着るように言うのは俺の役目。時々は声を荒げ、着ないとひっぱたくぞ、と脅して、みゅうはようやく服を着るのだった。俺がいない山荘でのみゅうとのふたり暮らしでは、隆也はさぞかし苦労していたのだろう。

まあ、俺はいくぶんかはみゅうの裸に慣れた。無感動ではないが、年のころなら幸生と同じくらいの少女の裸なんぞに動揺するほど、俺は純ではない。してみると、隆也は俺よりは純情なのか。あの弟にも可愛いところはあるのだろうか。

タオルで身体をぬぐいもしなかったようで、水滴をしたたらせたみゅうが、素っ裸でダイニングに入ってきた。

「腹が減ったよお」

「おまえは女の子だろ。腹が減ったは男の言葉だ。おなかですいたと言いなさい。服を着ないとおやつはあげない」

「いいもん。勝手に食うもん」

「食うじゃない。食べるだ。言うことを聞かないのか。ぶたれてもいいんだな」

「隆也兄ちゃんはぶつなんて言わないよ」

「俺は隆也ではない。隆也ほどにおまえを甘やかすつもりはない。猫だったらいいけど、人間の女の子には躰もしないとな。幸生を躰けたようにおまえにもしようか？」

「なんだか知らないけど、怖いからやだ」

脅しであっても、女の子をぶつとは言いたくないのだが、みゅうの本質は猫なのだから、人間の女の子とは扱いを変えてもいいのだ。みゅうは口をとがらせていたが、ようやく俺の言いつけを聞き、クリームいろのワンピースを着てきた。

「いい子だ。おやつをあげようね。おいで」

「みゅう、シュークリームのクリームが食べたい」

「クリームだけだろ。シュー皮は俺が食うから、そこにすわって」

「はあい」

弟たちと較べてみれば、みゅうは俺にはいくぶんかは素直であるような気がする。脅しだけではあっても、ぶつよ、と叱るのが功を奏しているのか。躰のためには言うだけならば致し方ないだろう。

シュークリームのおやつを食べながら、俺は考えた。

猫は成長が早い。春に我が家に迷い込んできたみゅうは、二ヶ月ばかりで少女の年頃になった。みゅうが変身猫になってからは一ヶ月ほど。その間は成長していないようにも思えるのだが、変身猫とは特殊なのだから、成長のメカニズムも一般の猫とは異なるのだろうか。

だとしても、みゅうは大人になっていく。人間よりも早く成長していく。季節が過ぎ去るたびに、一段階ずつ大人になっていくのだろう。

大人の猫は発情期を迎え、男を求めるのか。みゅうはただいま生後四ヶ月程度だろうから、もうすぐなのか？ 願わくば、大人になったみゅうは猫の姿で定着してくれるといいのだが。そうはいかないのだろうか。

今後、みゅうがどうなっていくのかは、人間たちにもみゅう自身にもわからない。猫で定着できないのならば、人間で定着してくれればいいのだが、変身猫で定着してしまったとしても……俺はみゅうを見捨てはしない。

隆也はすでに一人前の大人なのだから、彼の今後の人生に俺がお節介を焼く必要はない。幸生にしても十年とたたずに大人になるだろう。しかし、みゅうは……この愛らしい生き物がどんなふう成長したとしても、俺はみゅうを一生、守っていく心積もりでいる。

猫だとすればただ可愛がり、人間になったとしたら、妻にしてもいい。みゅうならば、幸生と同居するのをいやがらないはずだ。

そうして弟たちがいなくなったあとも、おまえの一生が終わるまでは、俺のそばにいたいよ、みゅう。そんなことを考えている俺は、普通の人間の女とは結婚できないだろうけれど、それはそれでもかまわない。

明日がどうなるとしても、おまえがどうなるとしても、俺はおまえをそばに置きたい。まるでプロポーズの台詞みたいだな、と苦笑しつつ、俺はクリームをなめているみゅうを見ていた。

待てよ、隆也や幸生もその気になったらどうする？ みゅうをめぐる兄弟三人の争奪戦か。いいや、そうになったら俺が勝つ。長兄の威光を発揮してみせる。気の早い想像までをしてしまっている俺を見つめて、みゅうは愛らしく小首をかしげた。

END

cat girl

<http://p.booklog.jp/book/31420>

著者 : quianred

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/quianred/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31420>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31420>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.